

## クリミア問題は対岸の火事にあらず

沖縄の金城テル女史が警告する

川島 順 予科21-7  
(越谷市) 航空7-1

ウクライナの政変のどさくさに紛れて、クリミアでの住民投票によってクリミア半島の独立を画策したロシアはウライナ及びEU諸国の反対を押し切ってロシア連邦加盟に関する条約の調印を強行した。

この報道を聞いて真っ先に思い浮かべたのは、中華帝国主義の事である。

秩父123号で、「中日、中ロ戦争は起こりうるか」のタイトルで述べた中国の政府系新聞「文匯報」が主張する中国の領土拡張政策のことである。その第1の標的がチベットであった。チベットには1949年から中共軍の侵略が始まった。1949～1979年の30年間で中国側に殺されたチベット人の数は約120万人。弾圧はその後も激しく続いている。さらに中国政府の強引な移住政策の結果、600万人のチベット人が暮らしている地域に、なんと750万人もの非チベットが流入し、しかも現在進行形で移住は続いている。

新疆ウイグル自治区、モンゴル自治区でも同様に計画的な漢民族の入植が進んでおり、ウイグル地区では50%、モンゴル地区では80%以上にも達している。旧満州でも漢民族の入植は満州時代からも続いている。今では満州族は少数民族になっている。

この様に大国の人海戦術による領土侵略は現在も日常的に行われている。

『2040年から45年までは「中国固有の領土」である尖閣諸島や琉球を取り戻す

ため日本との戦争が想定される』と秩父123号で紹介した文匯報の主張は、尖閣諸島はともかくまさか沖縄まではと高を括っていたが、今回のクリミアの騒動や沖縄での琉球独立党の誕生等を見るに付け、対岸の火事では済まされない気がしてきた。

「日本文化チャンネル桜」3月12日の動画『沖縄の声』『孫子の兵法と那覇市の中華街化』をフェイスブックのyouチューブで発見した。

[www.youtube.com/watch?v=7ouu6apPFUI](http://www.youtube.com/watch?v=7ouu6apPFUI)

キャスターは宮平大作、新川優子、金城テルの3名であるが、特に金城テルの「言いたい放題」では、現在、翁長那覇市長が推進している波之上臨海道路沿いの若狭緑地に建てる高さ15メートルの「龍柱」の建設に強く反対している。



### テレビ放送で熱弁を振るう金城テル女史

その理由は、那覇市長は「龍柱を中国との交流の拠点としたい」と言っているが、この龍柱を起点として現在何もない若狭緑地にチャイナタウンが出現することは目に見えている。



最近、池袋駅の北西地区や川口市の公営住宅芝園団地に新華僑によって突如としてチャイナタウンが出現して地域住民との間でトラブルが絶えないことは周知の事である。

また、この龍柱の建設には政府の一活交付金2億5400万円が流用され、しかもその建設は中国系企業に発注されることが内定しているとのことである。庇を貸して母屋を取られるの諺の通り、那覇市ばかりでなく沖縄全体が乗っ取られる危険性がある。

その危険性については、産経新聞の「正論」2013.6.13、西原正（平和安全保障研究所理事長）の「沖縄独立運動は中国の思う壺だ」を引用し、膨張する中国の軍事力を背景に、孫子の兵法（敵の10倍の兵力があるときは敵を包囲するだけで敵は降参する。5倍の場合は挑戦する。2倍の場合は敵の分裂を計る。少ない時は逃げる）に則って侵略する中国の恐ろしさについて解説している。現在は2倍以下であるので、敵の分裂、即ち思想戦で敵の分裂を計る時であると考えているであろう。

小生も昨年カンボジアを訪問した。カンボジアの大都市、例えば、プノンペンやアンコールワットのあるシェムリアップでは都市部に住めるのは役人と華僑だけであると現地人が嘆いていた。マレーシアやミャンマーでも都市中心部は華僑に抑えられていると聞く。

金城テルの危惧の通り龍柱が起点となって那覇市の街が池袋や川口のように中華街化し、やがては、クリミヤ方式によって沖縄が乗っ取られてしまうと云う危険性があることを十分肝に銘じておかねばならないであろう。